
子どもの棲む森

くろやん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子どもの棲む森

【Nコード】

N9614H

【作者名】

くろやん

【あらすじ】

気がつくと、そこは辺り一面、真っ白な空間だった。男の子は風に導かれるまま歩いていくと、そこは―― 7/17 改定版UPしました。

ブローグ

開いている窓から風が入り、白いカーテンを揺らしている。

風に乗って聞こえてくる子どもたちの元気な声に、私は耳を傾け
そつと目を閉じた。

「きょうはなにしておそぶ？」

「じゃあ、あれやろうよ！ あれ！」

「あれー！？」

「わたしはいいよ！」

子どもたちはジャンケンをしてオニを決めるとぐるぐると回り始める。

かごめかごめ

籠の中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に

鶴と亀が滑った

後ろの正面だあれ

昭和初期には、すでに子どもたちの遊びの一つとして定着している童謡“かごめ”この唄には有名な都市伝説があります。

それは、ある妊婦——嫁の事を良く思っていない姑が嫁を階段から突き落とし、結果赤ちゃんは流産。その際、意識朦朧となりながらも「私（と私の赤ちゃん）を突き落としたのは誰……？」と言い、背後を振り向こうとしている様を綴った唄だというものです。

しかし、その解釈の仕方は唄の成り立ちという意味では正しかったのです。ある一点を除けば……。

再び、子どもたちの楽しそうな声が響いてくる。

どうやらオ二の子は目当ての人物を当てそなたったようだ。オ二の子は再びしゃがみこみ二巡目に入ろうとしていた——

第巻幕・出会い（前書き）

——此岸^{このよ}でも、

ましてや彼岸^{あのよ}でもない。

少し足を運べば届きそうなほど近くて、

けれど、いくら手を伸ばそうとも届かないほど遠いところに、

子どもたちだけがいる場所があると……。

そこは——

白く深い霧に包まれ、霧を抜けると今度は穏やかな光がその一帯へと降り注ぐ。

上を見上げれば、空の青がどこまでも続き、

周りに目を向ければ、広原を中心に木々の緑が広がる。

ある人はその場所をこう言いました。

“子どもの棲む森”と……。

第壱幕：出会い

——！？

ぼくは突然目が覚めた。

……何分。……いや、何時間。ぼくはここで眠っていたのだろうか？
辺りは真っ白で本当に何も見えなくて霧のようなものが立ち込めている。

これは夢？ それとも現実？

耳を澄ましてみても——シン——と静まり返るだけで、何一つ聞こえない。しかし、不思議と嫌な感じはしなかった。

そして、この白い場所にも僅かな風が流れこんでいることに気がついた。ぼくは立ち上がるとその風の方へ少しづつ歩き始めた。

白い霧はどこまでも続く

未だに何も見えない

それなのに、ぼくはそれを不安に感じることはなかった。

どのくらい歩いただろう？ 急に目の前が明るくなってきた。それは目をずっと開けていられないくらいの眩しい光だった。少しずつ、その光にも慣れ、目を開くとそこは——緑の木々に覆われた森の中だった。しかし、樹海のような鬱蒼とした森ではなく、程よく

木々の隙間から入った木漏れ日で森を明るく照らしていた。上に目を向ければ、雲一つないどこまでも広がる青い空が映った。

ここはどこだろう？　ぼくはただ呆然と立ち尽くしていた。

遠くの方からは小鳥の囀りに混じり、子どもたちの楽しそうな声が微かに聞こえてくる。

誰かいるのかな？　そう思い、再び歩き出そうとした——その時だった。

——！

自分に向けられる視線に気が付いて、弾かれるように振り返った。そこには小さな女の子が立って、こちらを見ていた。

それがぼくたちの出会いだった。

第式幕：森（前書き）

黒に白のフリルがついたワンピースを着ている女の子。

時折、吹く風に揺れる亜麻色の長い髪が同じくらいの歳とは思えないほど大人びた雰囲気を漂わせていた。

女の子はニコツと微笑むと、ぼくに話しかけてきた。

「あなた、名前は？」

「ぼく？　ぼくの、なまえは……………ゆう……………ゆうくん」

「ゆうくん？」

「うん。ゆうくん」

「そう、いい名前だね。」

わたしはうさぎ。ゆうくん、あなたを迎えに来たの」

「ぼくを？」

「みんな待っているから、いこっ」

うさぎと名乗る少女に導かれるように、ぼくは森の中を歩いていく。

第貳幕：森

しばらく歩くと、遠くの方から子どもたちの声が聞こえてきた。木に覆われた森は、いつの間にかひらけ、見晴らしのよさそうな広い場所に出ていた。そこには——たくさんの子どもたちがいた。

子どもたちはそれぞれ遊具で遊んだり、おいかけっこをしていた。森の真ん中に、子どもたちだけという不思議な光景に見入るぼくにうさぎは告げる——

「ようこそ、ゆうくん。子どもの棲む森へ」

「子どもの……すむ……もり？ それって……どういう——」

「あ、おねえちゃんだ。おねえちゃん」

どういうこと？ と聞こうとしたゆうの言葉は、彼女の姿に気が付いた子どもたちによって遮られることとなった。

あっという間に子どもたちに囲まれ、困ったような表情を浮かべるうさぎ。

よくよく見れば、子どもたちはみんな、まだ幼さの残る顔立ちをしていた。

お姉ちゃん、あそぼー。とせがむ子どもたち。

うさぎは、子どもたちと同じ目線の高さになるように屈むと、ゆうの方をチラッと見てから——

「ごめんね。」

お姉ちゃん、やらなきゃいけないことがあるから、みんな、ちょっと向こうで遊んでいてね」

——と言い聞かせるように言う。

子どもたちは、うさぎとゆうを交互に見ると、「わかったー」と言って、広場の方へと走っていった。

元気に走っていく子どもたちを見届けてから、うさぎはゆうの方へ振り返る。

「ごめんね、ゆうくん。」

あの子たちも悪い子たちじゃないんだけど……」

そう言つと、うさぎはゆうを案内するかのように、少し前を歩き始めた。

うさぎと並んで歩いていると、何かが、ゆうの目の端に止まった。

(なんだろう……?)

目の前に存在する“それ”に、奇妙な既視感を覚える。

「どうしたの、ゆうくん？」

ああ……あれ？ あれはね——」

足を止め、それを見つめるべくを不思議に思ったのか、うさぎが尋ねてくる。

しかし、ぼくはうさぎの言葉を無視して、徐にそれに近づくと、ゆっくり腰をかける。

——ギシッ——と、小さく木の枝が軋む様な音がした。

用途のわからない、それ。

わからないはずなのに、ぼくは自然と体を前へ動かしていた。
風を受けて——ギィ——ギィ——と小気味いい音を響かせ、前後に揺れる。

（前にも、こんな光景を見たことがあった……？）

「ゆうくん、もっと後ろに下がって、足で土を蹴るんだよ」

いつの間にか隣に来ていたうさぎ。

彼女の助言に従い、足で土を蹴ると、それは風を切り、前へ後ろへ大きく揺れる。

思わず、ゆうの顔にも笑みがこぼれる。

「ゆうくんは、ブランコが好きなんだね」

「……ぶらん……こ？」

「ゆうくん、もう少し遊んでいたい？」

ブランコを楽しそうに扱ぐゆうを見て、うさぎはそんなことを聞いてきた。

ゆうは、ブランコが大層気に入ったみたいで、「うん！」と迷わず返事をする。

「そう……。」

じゃあ、私、しばらくあの子たちの様子を見てくるね」

うさぎは、ゆうに一言告げると、子どもたちの様子を見に行くために、広場の方へまっすぐ歩いていく。

ゆうは、去っていくうさぎを目で送ると、再びブランコを扱ぎ出した。

——この時のぼくは、まだこの場所をただの遊び場ぐらいにしか思っていなかった。

でも、それが間違いだったと、この森の真実について知らされるのは、もう少し後のことになる。

第参幕：迷い子（前編）（前書き）

——思い出した……

——わたし……、わたしっ………！

——ゆうくん……わたしっ！　もう………死んでた………

彼女の突然の独白に、ぼくの頭の中は真っ白になった。

第参幕：迷い子（前編）

事の起こりは、数時間前に遡る。

ゆうがブランコで遊んでいた時のことだった。
何処からか、子どものすすり泣く声が聞こえてきたのだ。

気になったゆうは、ブランコを降りると声の方へ向かって歩き出す。

広場から脇に逸れた森の中、
その道をしばらく行った先に、「お母さん、お母さん」と繰り返す女の子の姿があった。

女の子は、少し離れた所で見ているゆうの存在にも気付かず、途方に暮れたように蹲ってしまう。

「ねえ、きみ、どうしたの？」

ぼくはできる限り、優しく声をかける。

女の子は、そこで初めてゆうの存在に気が付いたようだ。

ゆうの問いかけに女の子はしゃくりながらも小さい声で「……お母さんがいないの」と言った。

ゆうは、辺りをさっと見回してみるが、木や緑があるだけでお母

さんらしき人はいない。どうやら迷子のようにだ。

「大丈夫、すぐに見つかるよ。」

「ぼくも一緒にお母さんを探してあげるから！」

「……ひつく……ほんと？」

「うん！……だから、ねっ！」

袖で涙をぐしぐしと拭い、尋ねてくる女の子に、ゆうは大きく頷き返す。

その言葉に、ようやく顔を上げてくれた女の子。

女の子の顔はすでに涙でぼろぼろだった。

きっとお母さんと逸れてしまってから、今まで心細かったのだろう。

だからだろうか？ ゆうが声を掛けたことによって、女の子は再び泣き出してしまった。

茶色のショートカットに、おもちゃのような小さな髪留めをした、まだ幼さを感じさせる女の子。

ゆうは、なんとしても、この子をお母さんの元に連れてってあげようと、妙な使命感を胸に女の子の手を取ると、ゆっくりと歩き始める。

歩き始めて、しばらく――

ぼくは、女の子が落ち着いた頃を見計らって話しかける。

「ぼくの名前はゆう。きみの名前は？」

「……まゆ」

「まゆちゃんっていうんだ？」

「うん……」

「それで、お母さんとはどこで逸れちゃったの？」

「……うみのちかく」

「……うみ？」

「うん……」

「ほかに何かわかることは……」

まゆは首を横に振る。

ゆうは一つ小さなため息をつく、気持ちを新たに続ける。

「まゆちゃんのお母さんってどんな人？」

「髪が長くて、いつもお仕事してる……でも、まゆにはとってもやさしいよ」

「まゆちゃんはお母さんが大好きなんだね？」

「うん、大好き！」

まゆは本当にお母さんのことが好きみたいだ。

今も隣で、まゆとまゆのお母さんについて楽しそうに話す彼女を見て、そう思った。

（お母さんが……そういえば、ぼくのお母さんってどんな人だったか……？）

『ゆうくん』 そう、呼んでくれていたのはハッキリと覚えてい

けれど、お母さんが他に何を言っていてくれたかまでは思い出せなかった。

「……ゆうくん？」

「——えっ？」

気がつくと、まゆがぼくの顔をのぞき込むようにして見ていた。

「どうしたの？」

「え……あ……いや……なんでもないよ。」

「ごめんね、まゆちゃん」

まゆちゃんは、ぼくを不思議そうに見つめていたが、ぼくが行こうと促すと、笑顔になり「うんっ」とかえした。

二人は話をしながら、お母さん探しを再開した。

しばらく行くと、一人の男の子に出会った。

「ねえ、きみ、この子のお母さん知らない？」

ゆづの質問に男の子は首を横に振る。

「そっか……じゃあ、この辺りに海ってある？」

男の子は再度、首を横に振ったが、その後……けど、と続け、「湖ならあっちにあるよ」と指を指した。

ゆづは男の子に礼を言っていると、一先ず男の子が教えてくれた湖を目指して歩く。

男の子は二人が歩く先を黙って見つめていた。

静寂に包まれる森の中、それは目の前に広がった。

青色の大きな湖、水面は太陽の光が反射してきらきらと輝いていた。

その光景に、ゆうは感嘆の声を上げる。隣を見ると、まゆも、またその光景に目を奪われてしまっているようだ。

呆然としているまゆから離れ、一人水辺に寄る。

湖は湖底まで見通せそうなほどに澄み切っていた。

ゆうは屈みこむと、そっと湖に触れる。水は程よい冷たさで気持ちよかった。

「気持ちいいから、まゆちゃんもこっちにおいでよ！」
顔は湖に向けたまま、手を振って合図を送る。

「……………」
「まゆちゃん？」

返事をしない彼女を不思議に思い、首を向ける。

まゆは先程と変わらず、湖の少し手前にいた。…………が、何か様子がおかしい。心做しか、まゆの体が震えているようにも見える。

「いや…………いや…………いやああ！！！」
突如、森に響き渡る叫び声。

まゆはその場で頭を押さえ蹲ってしまふ。

ぼくは急いでまゆに駆け寄ると、「まゆちゃん！ まゆちゃんっ！」と何度も彼女の名前を呼ぶ。

「——っ！？ ゆ…………ゆうくん？」
「よかった…………大丈夫？ まゆちゃん？」

程なくして彼女は落ち着きを取り戻した。

ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、まゆは目の端に堪った涙を拭おうともせず、小さく言った。

「……いた」

まゆのあまりの小さな声に、ゆうは「えっ？」と聞き返す。

「思い出した……」

わたし……、わたし……

ゆうくん わたしっ、もう死んでた……」

涙ながらに告げる彼女の声は一際高く響いた気がした。

第四幕：迷い子（後編）（前書き）

「こつちにいたぞ！！」

助けようと海に飛び込んだ男の一人が大声で叫んだ。
その声に何人かの男が慌てて駆け寄ってくる。

「まだ息があるぞ！」

「救急車！ 救急車はまだかつ！」

岸壁で人の怒号が飛び交っている。

「おい！ こつちに子どもがいたぞー！」

「なにっ！？」

新たな知らせに、男たちは慌てて子どもの側へ駆け寄る。

「おいっ！ この子息してないぞ！？

誰か、人工呼吸！！」

静かな海から一変、辺りは騒然とした状況になった。

第四幕：迷い子（後編）

「私とお母さんは二人で暮らしていたの——」

＊

「まゆ——っ、

お母さん、お仕事に行ってくるから気を付けてお留守番しててね」

アパートの一室から聞こえる声。

一見、どこにでもあるような朝の風景。

幼稚園に行くことのできない女の子は、一日お母さんの帰りを待っていた。

女の子にはお父さんがいない。いや、いなくなってしまった。

お母さんは一生懸命働きながらも女の子を大切にしていた。
決して楽とは言えない……が、それでも二人は幸せだった。

そんなある日、家に二人の男がやってきた。

男たちによると、女の子の父親は家を出る少し前から多額の借金を抱えていたらしい。

その日を境に、男たちの執拗な取立てがはじまる。

母親が泣いて頼んでも、男たちは怒鳴り、大声を上げる。そんな毎日が続き、母親は心身ともに疲れていた。

＊

「そして……あの日、私はお母さんに手を引かれて歩いてた」

「お母さんはね、私を見つめてはしきりにこう言っの。
ごめんね……ごめんね……って」

「私はお母さんに抱き抱えられた。
眼下に広がる青い海、太陽の光が反射してきらきらと輝いていた。
次の瞬間、わたしは海に叩きつけられた。」

そう告げるまゆの体は微かに震えていた。

小鳥の囀りや遠くの方で聞こえていた子どもたちの声は、今は聞こえない。

まるで……今、この時、この森にいるのがゆうとまゆの二人だけしかないかのような静けさだった。

「でも、ぼくたちは、今、ここにいるよ」

しかし、まゆは気が動転しているのか、ぼくの言葉が耳に入っていないようだ。

どうしたらいいのか、と考えていると――

「ここにいたんだ……」

――突然、後ろから声がした。

振り返ると、そこにはうさぎがいた。

声を掛けようと口を開きかけたゆうに、うさぎは手で制して「大丈夫。全部わかってるから」と小さく呟いた。

すれ違い様に見えたうさぎの姿が悲しげに映ったのは思い過ぎか？

それとも……

「まゆちゃん……だったよね？」

「うん……」

「単刀直入に言っわ。」

まゆちゃん、あなたはまだ死んでいない」

「……えっ……？」

二人——ゆうとまゆは同時に驚きの声を上げた。しかし、二人の感情は全くの正反対だった。

「だって……わたし、お母さんと一緒に海に飛び込んだんだよ」

「そう……。でも、あなたはその場に居合わせた人たちによって、助けられたの」

「じゃあ……、お母さんは……？」

「大丈夫、あなたのお母さんは無事。」

だから早く、こんな悪い夢から覚めて、お母さんの所に帰りなさい」

「……帰れるの？ お母さんの所に……」

うさぎは、コクつと頷く。

張り詰めていた気が抜けたのか、まゆはペタンと座った。

……が、次の瞬間、まゆはバツと顔を上げ「じゃあ……、ゆうくんは……？」と聞いてくる。

その問いに、うさぎは頷くとも、首を横に振るうともしなかった。

「いま……、今行かないと、まゆちゃん、あなたは二度とお母さんの所に帰れなくなる。」

それでもいいの？」

まゆは首を横にブンブンと振る。

「それなら、ゆうくんとは、ここでお別れよ」
「……」

まゆは、少し吹っ切れない気持ちを抱えながらも小さく頷いた。

まゆは、ぼくに向き直る。

沈黙が続く中、先に口を開いたのはまゆだった。

「ごめんね……ゆうくん。」

お母さんが待つてゐるみたいだから……わたし……」

俯き、呟くまゆ。

しかし、その言葉は続かない。

それを察してか、ゆうも元気を見せ付けるように言った。

「ばいばい、まゆちゃん。また一緒に遊ぼうね！」

その言葉にまゆははっとした様子を見せた。

「ゆうくん……ありがとね」

まゆは、うさぎに向き直る直前に、ポツリとそう言葉を洩らした。

まゆの周囲が眩しくなってくる。

あまりの眩しさに薄目になってしまふ。

光に飲み込まれるように、徐々にまゆは光の中へ消えてゆく。
消える間際、まゆの唇が小さく揺れた気がした。

——ゆうくん、ばいばい

——また一緒に遊ぼうね……約束だよ……

届かなかった言葉、

けれど、ぼくにはそう呟いたように思えた。

少し遅れて、ゆうも「……約束」と聞こえないほどの声量で呟く。
その様子をうさぎは何も言わず、ただ黙って見つめていた。

遠くから微かに聞こえる子どもたちの声、さらには小鳥の囀りが
耳に入ってくる。

うさぎは何も言わず、広場の方へと歩いていく。
その後ろ姿からは、一体何を思っているのか窺い知ることができ
なかった。

もう一度だけ後ろを振り返り、その場を後にする。

先を歩くうさぎとの距離が空いてるのを見て、ゆうは慌ててうさぎの後を追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9614h/>

子どもの棲む森

2010年11月12日16時26分発行